

宗像と英彦山

磯村 幸男

『沖ノ島研究』第四号にある野木雄大氏の「中世の宗像神信仰の展開」を
読ませていただいた。

氏は、『宗像大菩薩縁起』や『宗像宮創造記』、『鎮西彦山縁起』などの
記載から中世には宗像社の三女神信仰とは異なる独自の三女神降臨神話が作
られ、豊前国一帯で信仰されていたと指摘している。また、このことが信仰の
上で宗像社が宇佐宮と対立関係にあったのではなく、互いに影響を与え合いな
がら併存していたと記している。

読んで思い出したことがあった。それは、昭和五十七年から実施された英
彦山修験道遺跡の調査に関わることである。調査は、昭和五十七年は、朝日
新聞西部本社の主催事業として、南岳経塚の発掘・峰入コースの踏査・窟の所
在と遺物の調査が行われ、その成果は朝日新聞西部本社から『英彦山』（昭
五七）、『英彦山発掘』（昭五八）としてまとめられた。それを踏まえ、昭和
五十八・五十九年度に添田町の事業として調査が実施されたものである。私
が関わったのは北岳の経塚の調査により出土した経筒についての報告である。
以下、『英彦山修験道遺跡』（一九八五年、添田町教育委員会）から私の文
責分を書き出してみることとする。

二の二 歴史の概要

英彦山の歴史の草創期については、全く明らかになっていない。『彦山
縁起』には、継体天皇二十五年（西暦五三一年）に中国の北魏の善正
という僧によって開かれたとされており、また英彦山中興の祖として法
蓮を伝えている。善正上人は、英彦山の「石窟に卜居し、藤葛を衣と
為し、果臝を飲に充つ、石泉を飲んで松柏に陰し、恬として寒燠を度
て時機の稔を待つ」生活し、修業しその姿を見た獵師の藤原恒雄とい
うものが第一の弟子になったという。また、法蓮上人については、『続日
本紀』大宝三年（七〇三）九月二十五日条や養老五年（七二二）六
月三日条に記されており、医術に長け、豊前国の野四〇町を与えられ、
宇佐君の姓を賜っている。こうした人達の活躍は、英彦山の歴史にとっ
ては伝説の域を出ないが、法蓮上人については『続日本紀』に書かれた
人物でもあり、英彦山という限定した地域ではなく、豊前という地域
の中で信仰の中心的人物として存在していたと考えることが出来る。

（中 略）

なお、宗像郡玄海町興聖寺の色定法師が書写した一筆一切経三八卷
の奥書には、建久元年（一一九〇）八月から同二年七月の間に「彦山
権現」、「彦山三所権現」の貴水を以てこれを書いたことが記載されて
いる。（広渡正利著「中世の彦山」北九州市立歴史博物館刊『研究

(中略)

四 おわりに(北岳で確認された経塚出土の経筒の台座の墨書銘についての所見)(図版)

北岳出土の鑄銅製三段積上式経筒台裏の墨書銘「王七房」は、中国人の名と考えられ、房は女性の意で宋人王氏の第七婦人のことであろう。

(中略)

王氏は、宋商人の一人と思われる。当時の公的な日宋貿易は大宰府を窓口に行われていたが、一一世紀頃になると不入権をもった荘園領主や荘官と宋商人達は公然と密貿易を実施するようになった。宮崎八幡宮領などは領内に博多を有し、この地に宋人達の居留地を画した。このような荘園領主と宋商との関係は他の寺社領にも見られ、宗像神社領も同様であった。

特に宗像神社と宋商との結び付きは、かなり強いものであったらしく、『宗像神社史』下巻所載の「宗像系図」によれば、第二五・二八・三〇・三一・三五代と五代も大宮司職を勤めた氏實は、宋商人の一族と見られる女性を妻としている。(系図参照)この宋商とは王氏であり、その子氏忠も張氏を妻としている。このことは宗像神社が占めていた貿易上の地位を推し量ることが出来る。

(中略)

果たしてこのように登場してくる王氏が、英彦山埋経経筒の王氏と同一のものなのかは確認する術はない。

しかし、ここで今一度宗像神社について述べてみよう。宗像神社は、田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命の三女神を祭神としている。この三女神は『彦山縁起』にも登場している。それは三女神は当初英彦山にあり、大乙貴神と共に鎮座していたが、伊弉册尊、速玉之男、泉津事解之男の三神に英彦山を献じ、宗像宮に移ったという記事である。また、今一つ英彦山と宗像宮の関係についての記事は、色定法師が一筆一切経を書写するに当たって前述のように建久元年(一一九〇)から同二年にかけて英彦山の貴水を以てしたというものである。

このようなことから一つの仮説として王氏が宗像大宮司家に嫁ぎ、この王氏の一族が、宗像宮と関係のある英彦山に経筒を奉納埋経したとも考えられるかも知れない。

以上のことから、中世においては宗像と英彦山とは、信仰上から非常に密接な関係にあったことが窺える。

『筑前国統風土記』卷之十六・宗像郡上・田島の項には、宗像と英彦山の関係について、以下のような記載がある。

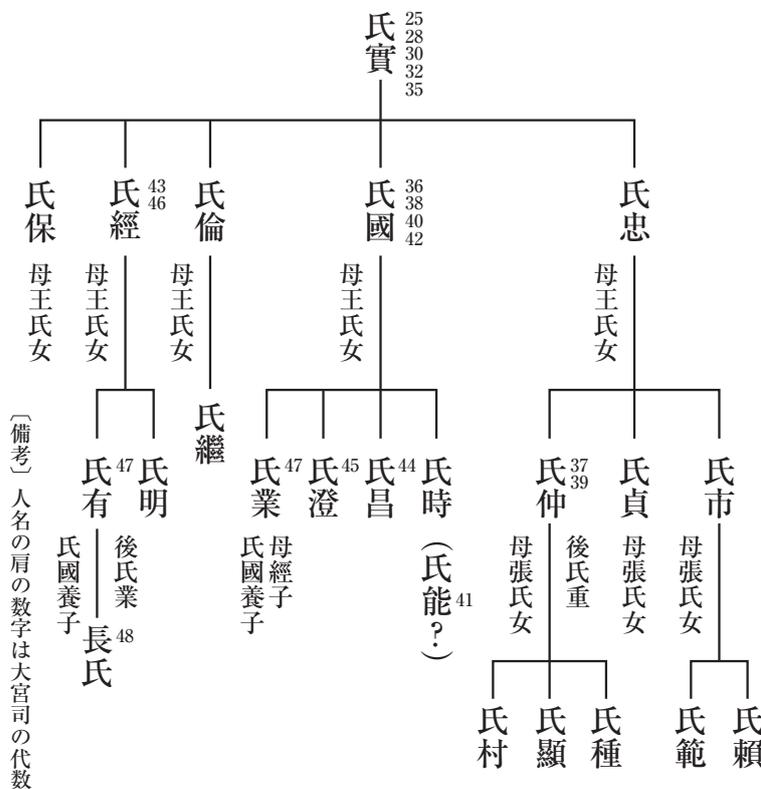
一田島社人村民共に、彦山の神に参詣することいにしへより甚禁ず。彦山の山伏も此地に入ら。彦山に参詣し、又彦山の者を此地に入れば、

必災難有と、古来いひ傳ふ。いかなる故といふ事をしらず。今に至りて、遊観のためにも彦山にゆく者なし。那珂郡上警固村、糟屋郡宇美村の里人も、亦かくの如しと云。

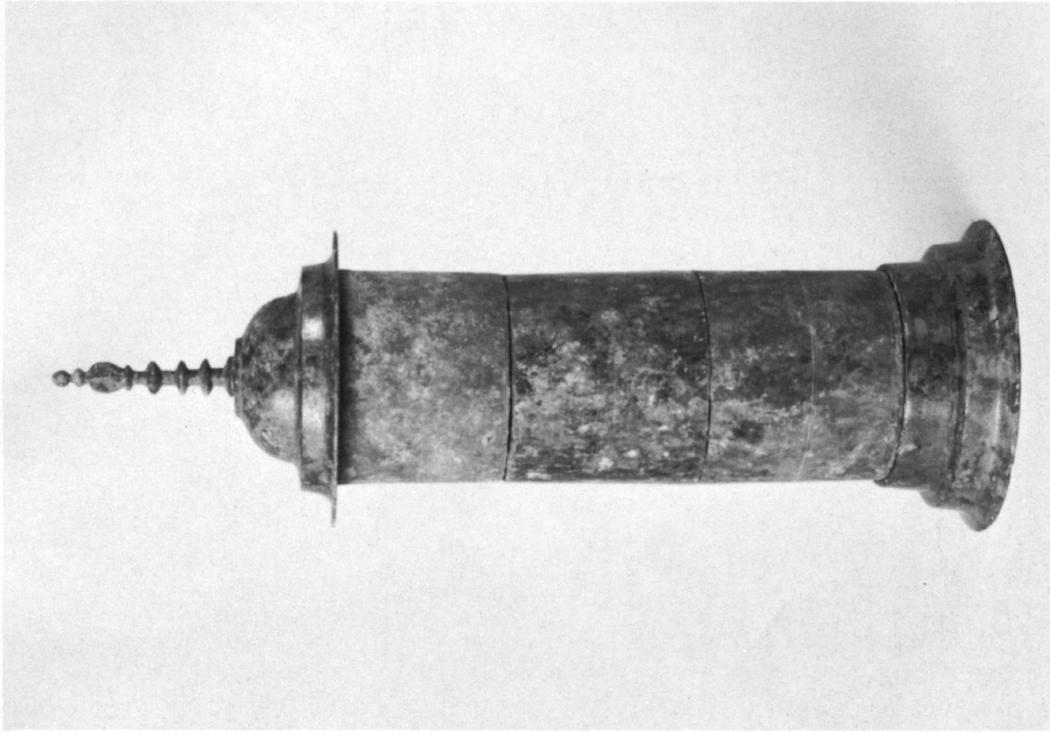
つまり、近世では、宗像と英彦山とは敵対関係にあったと見なされているのである。このことの解釈として『宗像神社史』下巻では、「これは戦国時代豊前の大友氏と宗像氏とが相拮抗して争った時代の名残りであろうか」(三四五頁)と記載されている。統風土記の記事の「いにしへ」をどこまで遡って表現しているかと云うことであるが、果たしてそうであろうか。そうだとしたら「那珂郡上警固村、糟屋郡宇美村」の里人も「かくの如し」していることとの整合性がとれるのだろうか。両村はいずれも上警固神社・宇美八幡神社を抱えている。特に宗像社は戦国期活躍した宗像大宮司家が氏貞で断絶し、宗像氏の庶家が継承し、江戸期には「寛文五年(一六六五)以降吉田神道により唯一神道に帰したことは、当社の祭祀の中から仏事を一掃させ、神道一本の祭祀に復帰する道を促進させるに至った」(『宗像神社史』下巻二九九頁)ことから考えると、神仏混合の修験道の考えを断つこと、その影響を今後の宗像社の信仰から排除したのではなからうか。中世より密接な関係であったからこそその措置ではなかったのかと思われるのが、如何であろうか。いずれにせよこの記事の内容は、政治的状況で解釈するのではなく、寧ろ信仰的な観点から読み解く事が必要なのではないかと思われるのである。過去英彦山の調査に関わった者として、また現在世界遺産「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の保存管

理に関わっている者として、調査報告の内容と『筑前国統風土記』の記事の整合性をどう整理するのか、ずっと気になっていた事であったので、一文を寄稿したものである。

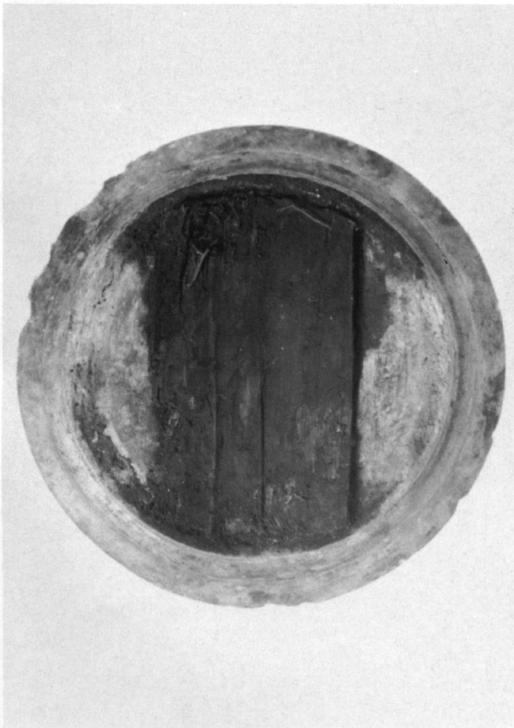
(福岡県世界遺産室参与)



図一 宗像大宮司系図 (部分)
 (『宗像神社史』下巻 454 頁、宗像神社復興期成会 1966 年より)



1. 鑄銅製三段積上式經筒



2. 杉 皮



3. 墨 書 銘

図二 英彦山北岳出土經筒図版（『英彦山修験道遺跡』添田町教育委員会、1985年より）